

保育者の「気になる」幼児の理解と援助に関する意識調査 —巡回相談カンファレンスにおける逐語記録から—

A Survey of Caregivers' Perceptions of the Understanding of and Support for Young Children with Problems, Based on a Verbatim Record of Rounds of Consultation Conference

河崎 美香 石倉 卓子
KAWASAKI Mika ISHIKURA Takako

本研究では、「気になる」幼児（C児）の他害行動の理解、援助の仕方についての保育者A、Bの困り感を、巡回相談カンファレンスでの発言から考察した。巡回相談員の進行による保育者集団の話し合いの中で、漠然としていた保育者A、Bの「気になる」ことを6つの観点に類別した。幼児を理解するためには、まず、保育者自身が幼児の「何」について「気になる」のかを明らかにする必要性を示唆した。

キーワード：幼児理解 気になる子ども 保育者集団 巡回相談カンファレンス

I 背景と目的

平成29年3月、新たな幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針、幼稚園教育要領が告示となり、幼児教育の重要性が改めて確認され、幼児期の終わりまでに育てて欲しい姿についても明記された。幼児の発達や内面の理解については以前にも増して保育者に問われることになろう。特に近年、保育上の問題として、気になる子どもへの対応の困難さが挙げられており¹⁾、幼児教育においても同様の問題が生じている。この対応の困難さが保育者自身の教育・保育に対する自信のなさにも影響しているのではないかと推察する。

では、保育者が「気になる」子というのはどのような子どもなのだろうか。行動の理解ができない、何を考えているのか分からない等、子どもによってその実態は様々であろう。本研究では、「気になる子ども」を、障害等の診断名のある子どもに加え、「LD・ADHD・高機能自閉症などのいわゆる軽度の発達障害や軽度の知的障害の特徴をもっているが、当面診断の不明であったりする子ども」を包括して定義する²⁾。つまり、ここでの「気になる子ども」とは、発達障害等の診断を受けている、いないにかかわらず、保育者から見て、気がかりな行動がある子どものことを指すこととする。

太田（1997）が統合保育を担当する保育者に対して行った質問紙調査では、「統合保育が障害児

によい場合、悪い場合の判断が困難」「障害児にとって適切な指導法とは何か分からない」「他の専門機関ほどに障害児の治療や指導ができない」「障害児自身が幼稚園を楽しんでいるのか疑問である」「他の子どもに目が届かなくなることがある」「行事の時にどうしたらよいかわからなくなる」などの苦慮している姿が見受けられる³⁾。また、芹澤(2010)によれば、現場で保育にかかわる保育者達は、これまでの知識や経験、日々の試行錯誤を通して、保育を工夫しているが、近年、「気になる子」の問題は急速に多様化しており、子ども自身の発達の問題なのか、養育の問題なのか、保育環境の問題なのかが不明確で、これまで蓄積してきた保育の専門性だけでは、子どもを理解することや保育の工夫を行っていくことに保育者が困難を感じたり、自信がもてなかったりするような事例が増えていると指摘する⁴⁾。尾崎(2010)によれば、幼稚園・保育所に対する社会的要望が起こってくると、保育者は子どもの障害の有無に大変敏感になり、また、発達障害の概念が周知されてくると、子どもの問題行動がそれに該当するのではないかと気になり始め、保育者は、これまで気にならなかった子どもに対しても「気になる子」ととらえるようになることが予想されると指摘する。また、明らかな診断名がないものの、保育の中で「気になる子」が増えてきているといわれる⁵⁾。

水内(2010)は、統合保育という形態における保育実践の意義や目的を、障害のある幼児の発達・成長の促進であり、具体的には、発達や知的能力に関する健常児群との差、諸能力のアンバランスのような個人内差、そして認知面、行動面、情緒面、他者との相互作用といったそれぞれの能力の他、検査や指標では測れないやさしさ、思いやりの育ちなども含めて子ども理解を深め、子どもの可能性を信じて支援を行うことであると指摘する⁶⁾。藤堂(2014)も、「発達障害は日本独自の概念で、(中略)世に言う、こだわり、衝動性、学習が困難という定義も表面的な症状を表しているにすぎず、本人たちの持っている困難さを表すものではない。本人たちは感覚の異常、つまり過敏であったり鈍麻であることで悩むことが多くある。快か不快かが自分たちの行動の基本にある」と語っている⁷⁾。さらに、発達障害児が抱える知覚・感覚面のアンバランスさから来る「日常生活での困難さ・疲労度の高さ」への理解、その子の「発達障害らしさ」と同時に「子どもらしさ」を大切にすること⁸⁾も叫ばれており、いずれにしても、その子の行動の本質に何があるのかを理解することが、その子の自分らしさを活かす生き方につながっていくということを示唆している。

さて、実際の保育現場では、保育者に幼児理解が求められる。岡村(2011)は、「気になる子ども」の保育において、悩みや問題を抱えている保育者は多いが、保育者の「気になる子ども」として見る視点や捉え方は多様であると指摘する。そして、「気になる子ども」の行動特徴を示した先行研究は多数存在するとした⁹⁾。例えば、子どもの姿に関するチェックリストを用いて保育者に1人の子どもの姿を思い浮かべて回答してもらう方法を取り、「気になる子ども」の特徴的姿を数値化、データ化した研究¹⁰⁾や、保育者がどのような「気になる」視点をもっているかの実態を明らかにした研究¹¹⁾がある。岡村(2011)は、アンケート調査により、担当する子どもの年齢によって保育者は「気になる子ども」の見方、捉え方に違いがあり、保育を難しくさせている要因や保育者が抱える問題について明らかにした¹²⁾。

これらの先行調査で明らかにされたことを踏まえた上で、本研究では、「気になる」幼児の所属するクラスの保育者にとって、幼児の何が「気になるのか」という視点から、幼児理解とその

援助について抱える悩みを考察する。

II 研究内容と方法

本研究では、保育者の「気になる」幼児の理解と援助に関する意識を明らかにすることを目的として、巡回相談カンファレンス全6回のうちの第1回目のカンファレンスを取り上げ、保育者A、Bの発言の質的内容を考察する。

1 本巡回相談の概要

本研究で取り上げる巡回相談は、F県が臨床心理士会に委託して実施した保育専門アドバイザー派遣モデル事業である。臨床心理士が保育所を訪問し、発達や行動に気がある子どもの行動観察、子どもへの適切な関わり方のアドバイスを行う事業である。筆者は、各園および臨床心理士会の了解を得て、巡回相談に同行した。

本巡回相談は、巡回相談員の進行により、保育者が気になる子どもにおいて一番解決したい課題を精選し、「保育者同士が協議して支援方法を考案し、それに基づく実践と振り返りを繰り返しながら対応への自信を高めることを目指した問題解決型の定期訪問コンサルテーション」¹³⁾である。

本研究における巡回相談員は、乳幼児期の発達及び障害のある子どもへの相談に12年間従事している臨床心理士であった。

2 研究対象と方法

実施保育所は、筆者が20XX～20XX+1年に巡回相談に同行したF県内のG保育所であり、巡回相談カンファレンスへの参加を6回行った。本研究はそのうちの第1回目のカンファレンス内容を使用したものであり、実施日は20XX年7月X日であった。

対象保育者は、対象児の所属する年少児クラス担任保育者A(保育歴28年)、年少児クラスに加配で入っている時短勤務保育者B(保育歴20年)である。

巡回相談時のカンファレンス内容を、同意を得てICレコーダーに録音し、保育者集団(A保育者、B保育者、所長、同年齢クラス担任)の発言を逐語記録し、分析を行った。カンファレンスの内容の他に、カンファレンスでの発言内容の背景情報を得るために、1人のインタビュアー(筆者)と、1人のインタビューイ(対象保育者)の1対1で、巡回相談同日のカンファレンスの前に30分間程度、半構造化面接による調査を実施した。面接内容は同意を得てICレコーダーに録音した。対象児と初めて会った時の印象、対象児の保育の内容、保護者や職員との連携の内容などの聞き取りを行い、保育者が感じたことや意識したことを自由に想起してもらった。また、こちらで用意した質問項目について保育者に答えてもらうスタイルをとったが、保育者の語りについては特に遮ることなく自由に語ってもらった。インタビュー調査後、録音した内容を逐語録に書き起こしたものと、第1回カンファレンスと同日に、同意を得て保育の様子をビデオ録画し、逐語録化したものを考察の参考資料とした。

対象児Cは、巡回相談開始時、3歳5ヶ月で、自発的な発語はなく、対面した保育者の帰りの挨拶に対して、ようやくオウム返して「(さ)(よ)なら」らしい発音が出るようになっていた。

3 倫理的配慮

本研究への協力は、研究の目的・方法・守秘義務等を示して依頼し、保育所長に了解を得て、A、B保育者より書面で同意を得た。

Ⅲ 結果および考察

カンファレンスでは、巡回相談員の進行により、保育者集団はC児に関して困っていることを自由に話し合った。保育者集団でのカンファレンスの中で、保育者A、BがC児に関して語った内容を6項目に類別し、C児の他害行動の何に悩んでいるのかを以下に示す。A保育者の発言は④、B保育者の発言は⑤とした。「」はカンファレンス中で語った内容である。カンファレンスでの保育者の発言の背景を補うために、一部、カンファレンス前のインタビュー(『』内)を示す。また、考察については、保育者の語りを分かりやすくする意図で、保育観察時の様子も適宜補足することとする。

1 C児の全体像がつかめない

- ④『気になる子どもに関する研修会に参加して学んだことを思い出して、どうしても頭の中で、発達が遅れていることは分かるけれど、どれくらい遅れているのか、この子はアスペルガーかな、自閉症かな、どちらかなという区別をしようとこだわり、本当のCちゃんの姿を見ようとしていないことに気がついて。区別が果たしたら、何か手立てが出てくると思っていました。』
- ⑤『本当に3歳児なのかなとまず思いました。自分の見ている3歳児とはイメージが違っていました。言葉が出ていなかった。長い時間、自分の興味のあることや関心があることをずっと見ているのが3歳児というイメージがあったけれど、Cちゃんにはそれがないですね。じっと集中して見るという時間がとても短くて。音がする、変わった物がくる、走るなど目に入ったものにキョロキョロしていて、すごく反応が目まぐるしく変わっていきます。集中して何かをする子ではないという印象ですね。普通の3歳児が興味を示すブロックやお絵かき、歌などにあまり興味を示さない。走る、歩く、他所へ移動する、音のする方へ向かっていく、そういう毎日。まるで、1、2歳児のよう。まるで1、2歳児のように、言葉で言えないので、何かあったらすぐに手足が出てしまうって感じで』
- ④「ふぁっと、自分の思うところに行って、ふぁっと帰ってくる。探したら、一人で遊戯室のハウスの中とか。先生、こっち来てよって誰かに求めることはないです。」

A、B両保育者は、過去に気になる子どもの保育に携わったことはあったものの、今回、3歳児でありながら理解言語や意味のある自発語がほとんどないC児に出会った。C児は周りで起きていることの意味理解が難しく、物音がしたり何か動いたりする刺激に反応しては走り回り、目の前にいる友達を突き倒したり、蹴ったりしてしまうことが多かったようだ。両保育者ともに、C児のような子どもは、今まで見たことのないタイプだと話している。昨今、保育所職員を対象に、気になる子どもの特性や対応、保護者との連携のあり方等の理解を通して保育の実践力を高めようとする研修会が多く実施されるようになってきている。両保育者も自主的に、気になる子どもに関する研修会に参加している。両保育者はよい保育者になろうと、発達についての知識や技術を身に付けることに必死になっていたが、A保育者は、診断名がないC児がどの障害に近いかをはっきりさせることでC児の行動を理解したいという思いが強く、C児自身を知ろうとしていな

かった自己を振り返っている。研修会での学びが、目の前のC児の実態の理解に結びつかないため、保育者として何をしたらよいか分らず、対処の難しさを感じている様子うかがえる。一方、B保育者はC児を個別でみる機会が多いためか、C児の行動を事実即して客観的に語り、1、2歳児や3歳児と比較して具体的な違いや特性を伝えようとしていることが分かる。両保育者はそれぞれの立場や方法でC児を理解しようとしているが、その先に進めないもどかしさを感じ取れる。

2 他害を予測できない

- ⑧『Cちゃんが自分の欲していることを通すために他の子どもに手足が出てしまうことを先に察して止めることができないんです。いつも後手に回ってしまう自分に後悔し反省するものの、乱暴したり壊したりした後に止めるのがやっとな。事前に止められず、いつも対応が遅い自分を何とかしたいです。』
- ⑨「ほんと、予測できない行動とか起こす。何が1番怖いかと言ったら、叩く、引っばる、押す、つねる。突然するので。あの子に関しては、抱っこかおんぶしとると、すごく静かなんですね。何も暴れたりしないし。されるがままになり、静かにしているんだけど、いざ、ぽっと下ろすと、とたんに動きが激しくなってきた。押すは、叩くは、走るはして。」
- ⑩「ただ、剣だろうと本だろうと手に持ったら、突然、人をバン！と叩いたり押したりしてしまうんです。」
- ⑪『突発的なことがよくあるので、何も無いのに、友達がCちゃんのそばを通るだけで、Cちゃんが何かするのではないかと思ってしまうんです。』

一番解決したい課題「友達を叩く、つねる、押す、かむ、友達に触って嫌がる行動をする」について語られた部分である。

集団保育の場では、子どもの他害行動は大きな問題であろう。林(2011)¹⁴⁾は1年間の保育記録のエピソードをKJ法で分析し、分類したが、保育者が子どもの育ちにおいて大切だと思っていることの中で特に強い願いが表れていたものとして、友達への暴力という行為に対して、その都度、根気強く、暴力は他者を傷つけることを話し続けたいということが度々記されていたとし、暴力で自分の気持ちを表す背景にはその子どもの理由が存在し、その子どもの言葉にならなかった思いをひも解き、他者を傷つけるという手段以外でその思いを表す方法を共に考えることが保育者の役割であるとする。両保育者ともに、C児の動きをよく見ようとしているものの、実際にはC児が他害するのを防ぎ切れずにいる。他害をされた他児の手当てをしたり、C児の代わりに謝ったりすることに終始して、他害を行うC児に支援するところまでには至っていない様子が、筆者が保育観察する中でも何度か見受けられた。特に、B保育者はC児の担当をしており、C児の動きを察して事前に支援を行うべきだと感じてはいるが、毎回間に合わず、支援が後手に回り、保育者として無力感を感じている。七木田ら(2004)¹⁵⁾統合保育において担当保育者の負担となるのは、子どもの行動が理解できないこと、どのように関わっていいか分からないという点が最も大きいと指摘する。

一方、A保育者は、C児が他害する状況について語ってはいるが、そこからC児の理解までに

は至っていない。

3 なぜか特定の子にばかり他害をする

- ④「自分たちから見たら、特定の子に見えます。いつもじゃないけど、あの子たち（D児、E児ら）のことが多いかな。」
- ⑤「そう思います。D児にしても、E児にしても、（他害をされた時の）ぎゃーという反応が大きい感じがします。すごい大きさに。確かに、痛いことは痛いんだろうけど。」
- ④「あの子たちが「きゃーきゃー」言ったら、その声を聞きつけて、自分も「きゃーきゃー」となるんですよね。その遊びに入りたいとかじゃなくて、その声を聞いて、気分が高揚してくるというか。」
- ⑤「その声（D児、E児のきゃーきゃーという声）を聞いたら、C児にスイッチが入るように感じるんです。」

他害を受けている子どもについて語られている部分である。この件について同席した他の保育者からは、C児はD児、E児とフィーリングが合い、気が合うと思うから近づいて行って他害をしてしまうのではないか、という意見が出された。それに対して、いつもC児を見ている両保育者ははっとした表情で顔を見合わせ、彼らの特徴を思い出し、他害された時のD児、E児の反応の大きさをあげている。他の保育者からC児の別の見方を得た両保育者が、他害行動にはC児なりの理由があるのかもしれないと感じた瞬間である。

ここでは、他害行動の背景として、二つの捉えによる発言が挙がっており、一つ目は、C児が友達と遊びたくて関わりを求め、その関わり方が未熟なため他害行動として表れてしまうというもの、二つ目は、C児は相手の反応がおもしろくて、快刺激を得るために意図的に他害してしまうというものである。七木田ら（2004）¹⁶⁾はカンファレンスの中で展開する「気づき」は実践に生かすことを目的として話される「気づき」であり、人的環境としての保育者の感受性を刺激することにつながり、実践的な「気づき」を生むと指摘する。生きた「気づき」を生む場としてのカンファレンスを経験することが、即実践に活かせる保育者の専門性の源となるだろうと述べている。

4 他害をするC児へのかかわり方が分からない

この項目では、以下、①②の2点に分けて述べたい。

(1) 背中におぶって安全確保していることへの後ろめたさ

- ④「B保育者は9時半から来られて、4時に帰られるので。Cちゃんは8時半に来るので、8時半から9時半の間は私一人です。Cちゃんを手を持ちたり、Cちゃんごめんね、って言っておんぶしたりしないと、突然つねったり、くじったりするので。押すは、叩くは、走るはして、だからついつい。」
- ④「聞くんですけど。私、安全のために、Cちゃんをおんぶしているんですけど、それでいいですか。（進行役が、別の方法が見付からない以上、人手がない時は仕方がないと話す。）あーよかった。それを聞いて安心しました。何か悪いことをしているんじゃないかって。」

A保育者は、C児が他害したり、他児の遊びを壊したりすることを防ぐために、保育者の背中にC児をおぶったまま保育を行っていた。しかし、徐々に周りの子どものことを意識して、自分も同じようにしたいという気持ちが芽生えつつあると捉えていたA保育者は、C児をおぶることが、C児のためにはよくないのではないかと後ろめたさを感じていたようである。しかし、人手がない時には、今のところ、他に方法が見付からないのならば、安全確保のためにおんぶをすることも仕方がないとの進行役の話を聞き、自分の援助に対する疑問や懸念を取り去ることができている。

(2) 強い口調で注意しても改善しない

- ⑧「保育者が、わっ！押した！というふうにやっちゃうと、はは一んって笑う。何ていうかな、にやっ。なんかそういう笑みがあります。だから、この子、私が大きなアクション起こすから、きっと楽しんでいるような気がします。だから、そつなく、表情もなくやっちゃった方が、Cちゃんにはつまらないっていうか。」
- ⑨「なんかこの頃、(私は) Cちゃんに怒るからなー。だめなことはだめって伝えんなし。感情的になっちゃいけないと思いつつながら。」
- ⑩「質問ですけど。Cちゃんは押したりつねったりします。そんな時にCちゃんにどんなふうにしたらいいですか。いけない！とか、やめて！とか、強く言っていていいですかね。Cちゃんじゃない場合はそういうことした場合は、やっちゃいけない！と、強く怒ります。そういうことをCちゃんみたいなタイプの子に言っちゃいけない場合もあるんですか？」
(進行役が、強く言ってみた印象を聞くと、)
- ⑪「なんか全然、響いていないというか。目を合わせて言うんだけど、目を反らしてしまうというか。」
- ⑫「言っても、通じとらんやろうと思うがやけど。周りの子に対して、あれ？Cちゃん、ダウンしても何も言わんとって、ぼくたちだけに言うがかわかと思われても嫌やし。だめなことはだめって伝えんなし。感情的になっちゃいけないと思いつつながら、つい。」

B保育者は、C児の行動に対する保育者の対応や言動が、C児の興味関心を惹いているのではないかと捉えている。そして、C児の表情に注目し、「にやっ」としたように見えるC児の内面には何が働いているのかを理解したいという思いを抱いているようである。また、B保育者が、C児への援助について他児と同じように対応してよいのかと進行役に質問していることから、援助についても他児とは違う考え方、別の方法が必要なのではないかと感じていることが読み取れる。一方、A保育者は、繰り返し行う他害行動に、理性では分かっている、つい感情的に叱ってしまい、その対応がC児への意味ある援助になっているのかどうか悩んでいる。また、C児だけを叱らないというのは他児にとって不公平感を募らせてしまうのではないかと懸念を抱え、集団保育と個別の配慮のはざままで援助の難しさを吐露している。様々な方向から関わってはみるものの、支援方法が見当たらない状況がうかがえる。

5 C児の保護者の理解が得られない

- ①「ママは無表情で喜怒哀楽がない。話しかけても、ふーん、の一言。ママ、仕事慣れられましたか、と聞いたら、微妙、の一言。目が合いません。」
- ②「(家庭でのC児の育ちについて) 聞いたことがない。こっちからは、今日はひも通しが好きでしたとか、こんな遊びが好きでしたとか伝えるんだけど、はあーの一言。偏食もすごくあるので、うちで何食べていますか、と聞いても、からあげ、で終わり。」
- ③「今日の連絡帳は、本人のペースで言葉を覚えていけばいいと思います、と書いてありました。だから、焦らない。この子はこういうゆっくりした育ちなんだという雰囲気がありました。だから、お母さんは、子どもってこんなもの、というふうに思っていらっしゃるんじゃないかな。お母さんなの。そのうち、言葉は知っていくだろう。あえてしゃべったりしなくても。自然にしていればいいんじゃないのっていう雰囲気。」
- ④「いずれは治る。普通になると思っていらっしゃるのかな。押したり、叩いたりするもので、どうですか? ってママに聞いたら、多分、テレビのせいと思う」って言われて。(私は) テレビのせいではないと思ったりして。」

C児の内面や行動を理解するためには、保護者との共通理解と連携が不可欠であるが、C児についての保護者と保育者の理解の仕方にズレが生じている部分である。C児の保護者は、自分の子どもに気がかりなことはないという雰囲気、子どもの問題に気付いていないか、あえて向き合わないようにしている様子だと両保育者は嘆いている。保護者はC児の言葉が出ないことは気にしているものの、他害に関しては、テレビでの戦闘ものが影響していると考えており、ゆっくりだがようやく年相応に戦闘ものに興味を示してくれたことをC児の成長として感じている様子も見受けられる。保育者は諦めずに、登・降所時に、直接母親と顔を合わせて話したり、連絡帳で様子を伝えたりと働きかけているが、こちらの伝えたいことがなかなか保護者には伝わらず、もどかしさを感じている様子が見ええる。

6 他害をされた他児の保護者への説明ができない

- ①『やられた方にどう言おうかと思ってしまう。痛かったね、と言うだけでいいのか…。子どもの後ろには保護者がいて、今日もこんなことがありました、すみませんと言っているけれど、もっと他に言わなければいけないことがあるのではないかと思っています。』
- ②「何が担任として一番心配かという、やられた子に対して、3、4歳になると、こんなことあった、あんなことあったって家で言うので、今日もCちゃんにつねられたとか、今日もCちゃんにたたかれたとかって。毎日、おうちの方から、よくあることやから、全然気にしていませんって言われても、やっぱり、どうやって伝えたらいいのかという、それがすごく悩み。最初のうちは、Cちゃん、まだ遊びたいから、遊びたいっていうのが言えなくて、押したりするんです。すみませんって言っていたんです。それが、いつまでも、ずーっと続くのかって。親に対して、どういうことを、上手に言えばいいのかって悩みです。」
- ③「けがさせられた子どもの統計をとってみて、そういう子が例えば、Dちゃんが多いと分かったとすれば、その保護者の方にどういうふうに伝えたらいいのか。」

- ④「もうすでに、あるおばあちゃんがこういう子いるんでしょ？うちの子が、保育所、行きたくないって言うがですけど。それで、そういうときに、早いうちなら、(Cちゃん)まだ慣れんからねって言えるけど。でも、もうそんな時期も終わってしまっただけ。」
- ⑤「そういうの、どういうふうに保護者の方に伝えて、理解を求めたらいいのでしょうか？自分たちも、なるべく言いたくないから、Cちゃんが友達のをばに行こうとすると何かするんじゃないかと止めに入りそうになったりするの。」
- ⑥「ギャッ！」って言うてくれた時には、すぐ、駆け付けられるんだけど、我慢するっていうか、分からないときがあつて。子どもたちには何かあつたら先生たちに声かけてとは言ってるんですけど。なんか、その子も大したことないやと思つて言わなくて。家帰つて、親が、あれ？これ、なに？って聞かれたら、子どもがCちゃんにやられたって言うて。そういうのもあつたんで。ただ、すみませんでしたって。」
- ⑦「今日、Eちゃんのパパが、子どもを抱っこしてきて、ここに傷付いていたって。本人はCちゃんがやったと言うんだと言われて。こちらは、すみませんでしたと言うだけで。ただ、ただ謝るだけだったんだけど、その後、パパが帰つてから、「お父さん、お母さん、怒つた？」って聞いてしまいました。」
- ⑧「私、あっ、すみません。すごいプレッシャー感じるんですけど。(保護者にCちゃん担当のくせして)あの人、何見とるがやろうねって言われそうですよね、私の立場って。結局、そういうふうになっていくと思います。わが子がかわいいのは当然やし。どの親もわが子が一番かわいい。これだけけがさせられて、青あざつくつてくると、あの先生は何を見とるがかねってなる。自分が親だったら、そんなふうにするだろうなって。頑張っているつもりなんですけど。なーん、できんから。」

他害を受けた子どもの保護者からの数々の訴えに対する対応の困難さを語っている部分である。1～5の項目に比して発言が格段に増えていることから、本項目に対する保育者の困り感の大きさが推察される。手のかかる子がクラスにいれば、他の子に保育者の目が届かず不安だと感じる保護者もいるだろう。ましてや、その子の他害がいつまでも収まらず、わが子が度々怪我をさせられるとなれば、保護者はいい気がしないことを保育者は痛いほど分かっている。初めのうちは、慣れないからだとか、関わり方が分からないだけだとかと説明はできるが、時期が過ぎてしまった今はその理由が通用しない、と捉えている。そして、いまだC児の内面や行動についての理解とその援助について糸口が見出せない状況が続いている。他害も収束する気配がない。近年、保護者に対する教育実践の説明責任が問われる中、このような時、保護者にどのように説明したらよいか、日々の生々しい現実突き当たり、保育者が苦悩している様子うかがえる。しかし、このような状況の中、普段から保育の悩みについて周りの職員に話すことが少なかったB保育者は、カンファレンスやインタビューの機会が与えられることで、初めて自分の気持ちを他者に話すことができたと言っている。

IV まとめと今後の課題

本研究では、保育者の「気になる」幼児の理解と援助に関する意識を明らかにすることを目的

として、巡回相談カンファレンス全6回のうちの第1回目のカンファレンスを取り上げ、保育者A、Bの発言の質的内容を考察した。

本巡回相談カンファレンスでは、保育者集団が、「気になる」幼児について1番解決したい課題を「他害行動」とし、相談員の進行のもと、幼児についての理解の仕方や困っていることについて自由に話してもらった。その結果、「気になる」点の内実として、「C児の全体像がつかめないこと」「他害を予測できないこと」「なぜか特定の子にばかり他害をすること」「他害をするC児へのかかわり方が分からないこと」「C児の保護者の理解が得られないこと」「他害をされた他児の保護者への説明ができないこと」が明らかとなり、大きく6つに類別された。

なお、カンファレンス全体を通して、保育者A、Bは、対象児の保育に対する不安や時には不満を抱くものの、保育の専門職としてそれを口に出せる立場ではないと感じ、学びながら進むしかない、と考える傾向が強いのではないかと推測された。幼児理解のありようは保護者支援にも付随する。保護者への説明を行うためにも、カンファレンスの場において、具体的に実践を話し合う場を設けることが大切である。

芦澤ら(2008)は、対象児の理解が促されれば、その結果、関心意欲が高まり、保育方針が支援されるという構造を明らかにした¹⁷⁾。保育者は困難にぶち当たったとき、外に答えを見出そうとしてもがくことがある。しかし、解決の糸口があるとすれば、何より先立つのが、対象児理解であるといえよう。カンファレンスに参加した保育者らは、はじめは漠然と気になっていたC児の気になる行動について、話し合いを進める中で、日常の保育の中でのエピソードを振り返り、少しずつC児の他害行動の何を気にしているのかという問題意識を明らかにしていった。芦澤(2010)は、保育者の心理的安定とは、問題が整理され、子どもへの理解が深まり、保育実践の見通しがもてることと、保育者間で問題が共有され、理解してもらったことによる不安の解消とサポートが得られることによる安心感によって生まれることを明らかにした。その上で、カンファレンスでは、悩みに共感するだけではなく、全員で問題に向き合い、経験や知見を出し合い、解決していこうとする姿勢をもつことが必要だと指摘する¹⁸⁾。

今後もカンファレンスを継続し、保育者集団が自分たちの保育実践を思い起こし、なぜその方法を選んだのか、なぜその考えに至ったのかなど、思考の履歴を整理することで、幼児理解と援助の方針等を全員が共通理解し、カンファレンスで出されたアイデアを実践してみることが必要であると考え。なお、C児に対して行った援助は、C児にとってどのような意味があるのか、C児は自らの変容に向けた手立てを学んでいるのかなどについても検討し、現実に行われている保育を日々粘り強く見直すことが適切な援助の方法につながっていくであろう。巡回相談カンファレンス全6回の時系列分析については、次の研究課題としたい。

林(2011)は、否定的に受け止めていた子どもの表現もその一部であることを認め、その行為の意味を一步踏み込んで考え、保育者としてどのように関わっていけばよいかという積極的な思考に結び付けていくことが考えられるとし、ここに、保育者としての成長があるのではないかと示唆している¹⁹⁾。保育者が対象児を「できない困った子」という否定的な捉え方から転じて、「こんなこともできる子」といった肯定的な捉え方をしていけるようになることが課題であろう。そして、そのような考え方が涵養されるためには、保育力の高まりによる自信の獲得とそれに基づく対象児への受容力の高まり、保育者集団の結束が必須であると考え。

引用文献

- 1) 郷間英世・圓尾奈津美・宮地知美・池田友美・郷間安美子 (2008) 幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究. 京都教育大学紀要. No. 113. 81-89
- 2) 無藤隆・神長美津子・柘植雅義・河村久 (2005) 「気になる子」の保育と就学支援. 東洋館出版社
- 3) 太田俊己 (1997) 統合保育の課題—保育所・幼稚園の立場から. 保健の科学. 39(10). 684-688
- 4) 芹澤清音 (2010) 発達臨床の専門性は保育カンファレンスで保育者をどのように支援するか—保育園の「気になる子」の事例検討会の分析—. 帝京大学文学部教育学科紀要 35. 25
- 5) 尾崎康子 (2010) 保育現場で「気になる子」. よくわかる障害児保育. ミネルヴァ書房. 9
- 6) 水内豊和 (2010) 障害保育の課題. よくわかる障害児保育. ミネルヴァ書房. 34-35
- 7) 藤堂栄子 (2014) 子育てを通して学んだ、私の発達障害理解 . 発達障害の「本当の理解」とは (市川宏伸編著) . 金子書房. 80
- 8) 上掲 . 木谷秀勝 (2014) 子どもの「発達障害らしさ」を活かす. 99
- 9) 岡村裕子 (2011) 保育者からみた「気になる子」についての調査研究 (滋賀大学大学院教育学研究科論文集第 14 号. 37
- 10) 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・他 (2003) 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査. 発達障害研究. 25(1) . 50-61
- 11) 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子 (2007) 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究. 小児保健研究. 66(6). 815-820
- 12) 前掲 9) . 37
- 13) 阿部美穂子 (2011) 気になる子どもの保育に関する問題解決型定期訪問コンサルテーション—保育者へのインタビュー調査による子ども評価・保育の自己評価の変化—. 日本心理臨床学会第 30 回大会発表論文集. 641
- 14) 林悠子 (2011) 保育実践における「過程の質」—保育記録の分析から—. 佛教大学社会福祉学部論集. 第 7 号. 80-81
- 15) 七木田敦 (2004) 幼稚園における統合保育の実践と保育カンファレンスの融合. 広島大学. 学部・附属学校共同研究機構研究紀要. 第 32 号. 87
- 16) 上掲. 88
- 17) 芦澤清音・浜谷直人・田中浩司 (2008) 「幼稚園への巡回相談による支援の機能と構造: X 市における発達臨床コンサルテーションの分析」. 発達心理学研究第 19 巻. 第 3 号. 262
- 18) 前掲 4). 34
- 19) 前掲 14). 91